

「あ……あの……ほんとに誤解なんです……私……ほんとに万引きなんかするつもりなくて……」

つい先程までいたコンビニの、道路を挟んでその向かいにある交番で私は二人の警察官に必死でそう訴えた。ただコンビニで買い物してただけなのに偶然商品が私のバッグに入ってしまう、それを偶々店員さんに見られて誤解を解く暇もなく交番に連絡されてしまった。すぐ近くだからという事で私はコンビニから交番へと移動させられ、そうして今は二人の警察官を前にどうにか誤解を解こうとしている最中だった。

「う～ん、万引きする人はみんなそう言うんですよえ……」

やれやれという感じに肩を竦めながら一人の警察官が言った。その全く信じてない様子に言葉を重ねようとすると、もう一人の警察官もその形の良い眉を顰めて口を開く。

「店員が貴方がバッグの中に商品を入れるのを見たんですよ。……それでもまだ言い逃れしますか？」

「っだ、だからそれは……偶然入っただけなんです……っっ」

入れた覚えなんかない。きっとその人の見間違いだと訴えるけど彼等はなかなか信じてはくれなかった。二つの整った顔が厳しい表情に染まり私に真っ直ぐ向けられる。お巡りさん達は二人ともモデルや俳優のよう

に美形で、こんな状況でなければ胸をときめかせていたかもしれない。

けれど今は当然そんな余裕はなく、イケメンの警察官に万引き犯だと疑われ焦りばかりが胸に湧き上がる。

「大丈夫ですよ、正直に話せば今ならまだ嚴重注意で済みますから。なので、盗った物を全てこちらに出してもらえますか？」

私が万引きしたと信じて疑わないお巡りさんが、机を手で『こちらに』と示して言う。私が制服を着ていてまだ学生だと分かるからか、僅かに口調を緩めて言ってくるけど盗んだ物などないのだから出しようがなかった。

机の上にあるのはバッグに偶然入ったボールペンのみ。盗った物なんかないと首を振ると別のお巡りさんにバッグを確認させてほしいと言われ抵抗する事なく素直に差し出した。

「確かに……バッグの中にはそれらしい物がありませんね……」

確認したお巡りさんがそう口にする。私はこれでようやく疑いも晴れただろうとホッとした。

「じゃ……じゃあ……っ」

もう帰っていいですよねと、そう期待を込めてイケメンなお巡りさん達を見ると彼等は「そうですね」と私を見つめ返して頷いた。

よかった、やっと帰れるーそう思って立ち上がろうと

する私の耳に続けてこんな言葉が耳に入る。

「それでは次は身体検査をしてみましょう。奥の部屋に移動しますのでついてきてもらえますか？」

その言葉に私はまだ終わらないんだと泣きそうになりながら「わかりました……」と返した。

先程まで話をしていた交番内の奥ーおそらくお巡りさん達が仮眠や食事をとる場所だと思われる、ベッドやテレビやロッカーなどが置いてある部屋に私達は移動した。

過去には一度だけ落とし物を届けに此处ではない交番に来た事はあったけど、当然その時はこんな奥の部屋には入らなかった。

警察官のプライベートがほんの僅かに垣間見え、そして男の人特有の香りが漂う狭い室内にドキドキする。

「では和泉さん、身体検査を始めますね。色々と体を触りますがあくまで捜査の為ですのでご協力下さい」

警察官の一人……林さんが私の右隣に立ってそう言うてくる。

「何も出なければすぐに帰れますので。和泉さん自身の為にもご協力お願い致します」

もう一人の警察官……五十嵐さんが私の左隣に立って真面目な口調で言った。

「あ……、わ……わかりました……」

二人のお巡りさんに挟まれドキドキが加速する。二人ともイケメンで、モデルみたいに背が高く、しかも声まで良くて、そんな二人に左右から囁くように話しかけられ、それどころじゃないというのに胸の鼓動が激しく鳴り響いた。

（そ……そうだ……これが終わったらようやく帰れる……私は何も持ってないんだから、きつともうすぐ帰れる筈……………ッ！）

そう自分に言い聞かせているの左右から腕に触られた。

「じっとしてて下さいね。すぐに終わりますから」

「……ここら辺は何も無いみたいですね。他の場所も触りますね」

「っ……うう……、は……はい……っ」

制服の上から腕、肩と触られる。何か隠してないかと確認する為だからか二人ともかなり力強く入念に私の体を触ってきた。

（ッ……は……はずかしい……っ、……で、でも……我慢しないと……っ）

警察官というだけあって背が高いだけでなく体つきもしっかりしていて、イケメンで逞しい男の人二人に挟まれ体を触られている状況が恥ずかしかった。

背中を触られ腰を触られ、相手は警察官だというのにま

るでいやらしい事をされているような気分になる。
(っ……な、なに考えて……ッ、こ、こんなの……ふたりに失礼じゃ……………ッ！！？)

「ッ！！！！？」

五十嵐さんが「次は此処を確認してみますね」と言っ
て手を伸ばした先はー私の胸だった。

同時に林さんも私の胸に手を伸ばし、左右の膨らみがム
ニユリ♡と一緒にタイミングで揉まれる。その後もむ
にゅむにゅ♡ぐにゅぐにゅ♡と左右から伸ばされた手
は同じような動きで私の胸を揉みしだいた。

(〜〜〜な、なんか……っ、ソコだけ長いよう
な………ッ♡)

他の場所は確認したらすぐ手が移動してたのに、胸を揉
む手はいつまで経ってもソコから離れなかった。

林さんも五十嵐さんも真剣な表情をして私の胸を見つ
め、その大きな手で遠慮なくぐにゅり♡ぐにゅり♡と揉
んでくる。

「あ……あの……ッ♡ ど、どうしてそこばかり
り……ッ♡？」

私はとうとう声に出して質問した。自分の胸が自由に揉
みしだかれるのを見つめながら恐る恐るそう口にする。
二人は手を動かすのを止めずに私の質問に答えた。

「ああ、それは女性はブラジャーをしてるからですよ。

それに加え和泉さんはだいたい胸が大きいので、こうして念入りに確認させてもらってるんです」

「胸が大きいと谷間とかに隠してる場合がありますからね。ああでも、ブラジャーを外して検査されるならすぐに終わると思いますが……どうしますか？」

私の右の胸を揉む林さんが反対にそう質問してくる。ブラジャーを外して……っ！？♡ そんな余計に恥ずかしくて無理だと思った私は小さく「こ……このままで……っ♡」と答えた。

私の答えに二人は「そうですか」と言って引き続き遠慮なく胸を揉んでくる。いや、揉むだけでなく下から持ち上げ揺さぶったり、お肉に指をぐり♡ぐり♡押し込んだりとますます遠慮がなくなってきた。

「ッ……！♡ ふっ……、んん……ッ♡ ふう……ふう……ンンンう……ッ♡♡」

(や……ッ♡だ……だめ……ッ♡っそこ……ちくび……ッ♡♡)

二人が同時に膨らみの中心に指を押し込ませ、それが丁度私の……乳首の位置で体が熱くなった。いくらブラジャーをしててもそんなに強く押されては、乳首がしっかりと刺激されて甘い感覚がじんわり込み上げてできてしまう。

「ふう……ふう……ふう……ふう……っ……♡♡
ふっ……ふううううう……♡♡」

グリ♡グリ♡グリ♡グリ♡グリ♡ グニリ♡グニリ♡グニリ♡ 指は執拗に中心部に押し込まれ私の乳首に刺激を与えた。指を捻りながら押し込んだり、目一杯押し込んだ状態で揺さぶったり、敏感な突起が男の人の指に思いつき押し潰される。

二人とも反対の手で私の背中をしっかりと支えて、後ろに下がる事もできず存分にソコを検査される。

私は胸の膨らみに押し込まれる男の人の指をただ見ている事しかできなかった。

たっぷりと乳首を弄られた後により胸から手が離れ、そして休む間もなく言葉をかけられる。

「では次は下の方を確認してみますね。すみませんがスカートを持ち上げててもらえますか？」

「っえ……ッ！？♡」

予想もしなかった指示に私はじん♡じん♡乳首が痺れてるのを感じながら驚きの声を上げた。

「もし自身でスカートを上げるのが嫌なら我々のどちらかが和泉さんのスカートを捲る事になりますが……その方がよろしいですか？」

「っそ……………ッ♡♡」

スカートを持ち上げるの自体が嫌なのだけどそれはもう決定事項なようで、私には自分で持ち上げるか二人のどちらかに持ち上げてもらうかの選択肢しかなかった。

「ッ……じ……自分で……持ち上げます……………♡♡」

すごく逡巡した後に掠れた声でそう口にする。

自分で捲るのも恥ずかしいけど、かと言って彼等のどちらかにスカートを手を捲ってほしいと言う勇気はなかった。二人は私をジイっと見下ろし、私がスカートを持ち上げるのを待つ。逃げられない二対の視線に私は『これはただの身体検査』と何度も自分に言い聞かせて震える手でスカートを持ち上げた。

「もう少し持ち上げて下さい。和泉さんの下着がちゃんと見えるくらいに」

「ッッ……！♡」

僅かに下着が隠れるくらいの位置で手を止めた私に五十嵐さんが容赦なくそう指示してきて、恥ずかしさを堪えて二人の望む位置までスカートを持ち上げた。

「はい、ありがとうございます。では触りますね」

私が必死の思いで下着を露わにしたのに、あくまで職務の一環だとばかりに淡々とした口調で林さんが言って、そしてやっぱり躊躇なく下着に包まれた下腹部を触ってきた。

「ッッ……♡ あ……うゝうゝ……………っ♡♡」

そして五十嵐さんかというと私のお尻の方を、撫でたり揉んだりとまた遠慮なく触ってきた。

さっきは左右からだっただけ今度は前後から、男の人の手に挟まれるように恥ずかしい場所を触られている。

(やだ……♡もぅ……早くおわって……っ♡♡)

スカートを持ち上げながらそんな事を願っていると、不意にーびりびりびりィィ……ッッ♡♡と尾骶骨辺りから痺れるような快感が、一気に背中を駆け上がっていった。

「ん？ コレは何だ？ 何かコリコリしたのがあるっぽいな……？」

コリ…ッ♡コリ…ッ♡コリ…ッ♡コリ…ッ♡コリ…ッ♡
♡ 林さんの指が私のクリトリスを押し潰していた。

「~~~~~ッッ♡♡♡ そ……っ、そこは……………ッッ♡♡」

指を押し込んでいるその場所が、私のクリトリスだと気付いてない林さんは何度も確かめるようにソコで指を動かした。

林さんが指を動かす度にクリトリスが容赦なく捏ねられる。

「そうですか？ こちらには何も無いっぽいですね……」

五十嵐さんはそう言って私のお尻の肉を揉みしだいた。五十嵐さんがお尻をがっちり掴んでいる為にやっぱり私は前から押し込まれる指から逃げる事ができず、クリトリスを好きに捏ねくり回される。

「ッッ……♡♡ ふ…ッ、ンン……ッッ♡♡ ~~~~~ッ♡そこは……ちがいます……ッッ♡♡そこ

は……なにもゝ……っひぐんんンン♡♡♡」

ぐに…♡ぐに…♡ぐに…♡ぐに…♡ぐに…♡ コリ…ッ
♡コリ…ッ♡コリ…ッ♡コリ…ッ♡コリ…ッ♡コリ…ッ
♡

「じゃあ“コレ”は何ですか？ 此処にあるこの、コリコリとしたモノは。和泉さんの口から教えていただけますか？」

林さんは厳しい口調で、指を強く動かしながら真っ直ぐ私の目を見てそう言ってきた。私が答えるまで許さないと言わんばかりに指を動かされ、お尻を五十嵐さんの手に掴まれている私は正直に答えるしかない。

「ン うう……っ♡♡ ～～～くッ♡くりとりす……です……♡♡そこは……くりとりすなんです……っァァァァァッ♡♡♡」

羞恥を堪えてその恥ずかしい名前を言ったのに、林さんは尚もクリトリスをぐり♡ぐり♡押してきた。

じゅわ…♡じゅわ…♡と中から滲み出てきた恥ずかしい汁が、露わにした下着を濡らしていく。

「クリトリス……？ 本当ですか？ 本当に“コレ”が、和泉さんのクリトリスなんですか？」

「ァァァァァァ♡♡♡ ほ、ほんとうです……♡しんじてください……アッアッアッアッ♡♡♡」

たっぷりと押し潰したら次はカリカリカリカリ～～♡
♡と肉芽を引っ掻いてきた。薄い生地越しに爪が敏感なお肉を擦る感触に淫らに声を上げる。

指先を素早く動かしながら林さんは「わかりました」と言った。

「クリトリスという話が本当なら、このまま弄り続ければ和泉さんはイクという事ですよね？ では和泉さんがイッたらコレがクリトリスだと認めましょう」

スカート裾を持ち上げた体勢のまま、信じられない思いでその言葉を聞いた。

このままイッたらなんて……そんなの無理だと訴えようと私が口を開く前に、五十嵐さんがお尻を揉みながら林さんの言葉にこう追加する。

「それが無理なら直接我々にクリトリスを見せるしかないですね。下着を下ろして和泉さんがクリトリスだと主張するソコを見せていただければ、手っ取り早く証明できますよ？」

「～～～～～ッ、そ、そんな……ッ♡♡そんなこと、できません……っ♡♡っひァァァァァッ♡♡♡」

「じゃあやっぱりイクしかありませんね」と無情にも告げ林さんは指を動かした。

カリカリカリカリカリカリぐりぐりぐりぐりぐり♡♡引っ掻いたり押し潰したりと容赦なくクリトリスを責め立ててくる。